

国連世界食糧計画日本事務所

やきや なおえ

代表就任の焼家直絵さん(44)



「WFPの日本人職員を増やしたい」と話す焼家さん

寄り添う気持ち 広島で培う

シオラレオネやミャンマーなどでの勤務経験が評価され、国連世界食糧計画(WFP)日本事務所の代表に登用された。就任した8日、東京出張所で「ゼロハンガー(世界の飢餓根絶)を達成するため、努力をしていきましょう」と職員に呼び掛けた。

国際支援に関心を抱くようになったのは、広島女学院高(広島市中区)時代。米国の先住民族が追いやられる様子を描いた映画「ダンス・ウィズ・ウルブズ」を見た

ことがきっかけの一つになった。「少数民族などマイノリティー(少数派)の側に立ちたいと考えたと振り返る。

「弱者に寄り添いたいという思いは、中高時代の広島の平和学習で培われたのかもしれない」とも推測する。支援が得られず苦勞した被爆者の話を聞いた授業が今も印象に残っているという。「私は異文化にも興味があったので、国際協力で携わりたいと考えるようになっていきました」

クリック

国連世界食糧計画(WFP) 飢餓、貧困をなくすことを目的とした国連機関で、本部はイタリア・ローマ。各国の拠出金や企業、個人の寄付金を基に、災害や紛争発生時の緊急食糧支援や、貧困地域での給食の提供などを行っている。日本は、年間約200億円を出す主要拠出国の一つ。

大学で国際関係について学んだ後、非政府組織(NGO)や国連ボランティアで、海外の紛争地域の難民支援などに取り組んだ。WFPを意識するようになったのは、イラクで働いていた1998年。難民への食糧支援や、貧困撲滅へ向けた政府への助言で成果を上げたWFPの活動を目の当たりにしたことで「将来、勤務したい」と考えたという。

外務省が若手を国際機関に派遣する試験に合格した後、2001

年にWFP入り。プータンやスリランカで支援の調整官などとして働いた。

「最も自分を成長させた経験」と位置付けるのは、エボラ出血熱が流行したシオラレオネで、患者やその家族たちへ食糧を届ける現地責任者として働いた13年からの2年間。自身が感染する恐れもあったため「人道支援をする覚悟が本当に自分にあるのか見詰め直した」と思い返す。

シオラレオネでは現地職員に支援の意義を繰り返し説き、リスクのある仕事に当たってもらうことで「士気を上げるリーダーシップを学ぶことができた」と組織統括の手応えもつつかんだ。その体験を踏まえ「日本事務所の代表として指導力のある日本人の国連職員を育てたい」とも思っている。

WFP日本事務所は、緊急食糧支援などに向けた資金集めとPRを主に担当する。「緊急支援などに注目が集まるが、社会制度など飢餓を生み出す根本原因の解決にも力を注いでいきたい」と考えている。

広島市西区出身で、東京都港区在住。(野崎建一郎)